

冬・点描

大橋千佳子

ケータイの息子は声を弾ませて満員電車の安全を説く

手作りのマスクに飽きて不織布の無機質にまた委ねたる冬

「キツツキも保険対象」窓口の笑みに勤勉の鳥重なる

農機庫の狩りを反芻するごとくミシミシと猫は子ねずみを喰む

イノシシはまさに居るらしタヌキにもウサギにも似ぬ雪の足跡

「変な奴ばかりが通うこんなところ母校じゃない」が彼のおはよう

授業中こっそり見せる免許証社会を拒みしは過去も過去

常緑の柘植^{つげ}大雪に枝を裂く伐られる春を待つことはせず

夜八時ホールに連帯感満つ月一の有酸素運動

父を偲んで
年越しはヤギも茶の間に招き入れコップ酒手の父三十五